

隣み深いサマリヤ人

(ルカ10・25〜37)

一、聖書をどう読むか？

律法の専門家であるパリサイ人は、
 彗星のごとく現れたイエスをテストし
 て、「先生。何をしたら、永遠のいのち
 を受け継ぐことができるでしょうか。」
 と語りました。彼には、「私は永遠のい
 のちを受け継いでいる」という自負心
 があったように思われます。

そこで主イエスは問い返されました。
 26節です。△「律法には何と書いてあり
 ますか。あなたはどの読んでいます
 か。」と。律法の専門家は答えました。
 27節です。△すると彼は答えた。『あな
 たは心を尽くし、いのちを尽くし、力を
 尽くし、知性を尽くして、あなたの神、
 主を愛しなさい』『また『あなたの隣人
 を自分自身のように愛しなさい』とあ
 ります。』と。これは、当時のラビたち
 が打ち出した、律法の二つの要約です。
 ご存じのように主イエスも、律法につ
 いて、この二つの要素を語られました。
 そして、イエスは答えられました。28
 節です。△イエスは言われた。『あなたの
 答えは正しい。それを実行しなさい。そ
 うすれば、いのちを得ます。』と。
 ところが、この律法の専門家には、自
 分はそれを行っているという自負心が

あったようです。したがって、永遠
 のいのちを受け継ぐにふさわしいとい
 う自信がありました。そこで、イエスに
 語ります。29節です。△では、私の隣
 人とはだれですか。』と。この人は、う
 そを言っています。隣人を自
 分自身のように愛している」という自
 負心を持っていました。ただし彼は、隣
 人を限定して、すなわち隣人の範囲を
 限定して善を行っていました。

二、主が語らんとしたこと

主イエスは、ご自身が創作した物語
 を語られました。30節です。△イエスは
 答えられた。『ある人が、エルサレムか
 らエリコへ下って行ったが、強盗に襲
 われた。強盗たちはその人の着ている
 物をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにし
 たまま立ち去った。』と語られました。△あ
 る人』とは巡礼者でありましょう。祭り
 のために、エルサレムに上り、それを済
 ませた後の出来事と考えるのが適当で
 す。続いて、31節、32節を見てまいり
 ます。△たまたま祭司が一人、その道を
 下って来たが、彼を見ると反対側を通り
 過ぎて行った。同じようにレビ人も、
 (略)反対側を通り過ぎて行った。』こ
 れもまた、当時あり得た話です。
 これを読まれて、皆さまはどのよう
 に思われるでしょうか。年若く、正義感
 に燃える青年であったら、「祭司もレビ
 人も、何とひどい連中だ。偽善者め！」

と思っかもしれません。あるいは、中高
 年層の中には、「祭司とレビ人のやった
 ことは良くない。しかし、倒れている男
 に係わったら時間が取られて、自分の
 勤めができなくなり、仕事に穴をあけ
 てしまう。服も汚れるし、見て見ぬ振り
 をした祭司とレビ人の気持ちがかかる」
 と思われる方がいるかも知れません。

33節を見てまいりましょう。△ところが
 旅をしていた一人のサマリヤ人は、そ
 の人のところに来ると、見てかわいそ
 うに思った。』とあります。主イエスは
 サマリヤ人を登場させました。ユダヤ
 人からするなら、宗教的な理由から付
 き合いたくない人たちでした。当然の
 こと、律法の専門家にとって、隣人のリ
 ストに入っていない人たちです。ところ
 が、このサマリヤ人は半殺しの目に遭
 ったユダヤ人の男を見て、△かわいそ
 うに思った』と書かれています。△かわい
 そうに思った』は、「内臓まで動かされ
 る」という意味のことばで、バビロン捕
 囚に始まる離散したユダヤ人がつくっ
 たことばと言われています。このサマ
 リヤ人は彼を介抱しました。34節です。
 △そして近寄って、傷にオリーブ油と
 ぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜
 に乗せて宿屋に連れて行って介抱し
 た。』そして、35節です。△次の日、
 彼はテナリ二枚を取り出し、宿屋の主人
 に渡して言った。『介抱してあげてくだ
 さい。もっと費用がかかったら、私が帰

りに払います。』とあります。

この物語は、隣人を限定した上で、
 「自分は隣人に良くしている。だから
 永遠のいのちを受け継ぐ資格がある」
 と自負していた律法の専門家に対して、
 隣人とはだれかを考えてもらうために、
 主イエスが創作された話です。

三、「サマリヤ人」に学ぶ

隣人に対して、私たちがどのように
 接するか。それは、私たちが聖書をどの
 ように読むかに関係しています。主イ
 エスは、ご自身が語られた創作物語に
 おいて、一人のサマリヤ人を隣み深い
 隣人として登場させました。彼は、半殺
 しになった男を介抱し、自分の家畜に
 乗せて宿屋まで行き、それ以降は宿屋
 の主人に任せています。ずっと付きつ
 きりになったわけではありません。彼は
 用事を済ませるために宿屋から出て行
 き、帰りに再び宿屋に寄り、介抱するた
 めにかかった費用を払いました。すな
 わち、このサマリヤ人は、自分のできる
 範囲で隣人を助けました。

隣人を愛する、隣人に良くするとは、
 幅のあることであり、答えは一つでな
 いと思います。主は、私たちができない
 ことまで要求されることはないと考え
 る者です。自分にできる範囲のことを
 継続的に、後は「私たちはなすべき
 ことをただけです」と、心の中で語つ
 たら良いのではないのでしょうか。